

令和6年度 第1回 千代田区教育ICT推進委員会 会議録

日時 令和6年8月29日(木) 午前9時00分～午前10時30分
場所 千代田区役所 4階 教育委員会室

議事日程

開会

委員紹介

副委員長選任

令和6年度1学期の取組報告

意見交換

事務連絡

閉会

出席者(10名)

信州大学 教育学部 准教授	佐藤 和紀
山梨大学 教育学部 准教授	三井 一希
お茶の水小学校・幼稚園児童保護会 会長	原 直樹
麴町中学校 地域コーディネーター	杉山 充洋
九段中等教育学校PA 会長	岡野 誠
富士見小学校 校長	小牧 来太
神田一橋中学校 校長	盛谷 樹
九段中等教育学校 統括校長	野村 公郎
教育委員会事務局子ども部 教育担当部長	大森 幹夫
教育委員会事務局子ども部指導課 課長	上原 史士

区側(1名)

教育長	堀米 孝尚
-----	-------

欠席者 なし

事務局(4名)

統括指導主事	内山 宝
管理係長	佐橋 俊亮
指導主事	相場 奨太
主事	松浦 洋介

委 員 長

皆様、おはようございます。本日は、ご多用のところご出席いただきまして、誠にありがとうございます。ただいまから、令和6年度第1回千代田区教育ICT推進委員会を開催させていただきます。

委員長を務めさせていただきます、教育担当部長の大森と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日、信州大学の佐藤先生、山梨大学の三井先生、富士見小学校の小牧校長先生はオンラインにてご出席いただいております。

なお、富士見小学校の小牧校長先生は、校務により途中退席をさせていただきます。それと、杉山委員が若干遅れてこちらに向かっているということですが、始めさせていただきますと思います。

また、本会議は議事要旨を作成する都合上、録音をさせていただきますので、あらかじめご了承ください。

それでは、初めに、教育長の堀米より皆様にご挨拶をさせていただきます。

堀米教育長、よろしくお願いいたします。

教 育 長

委員の皆様、おはようございます。教育長の堀米孝尚です。

令和6年度、第1回千代田区教育ICT推進委員会に当たりまして、ご挨拶を申し上げます。

まず、GIGAスクール構想が本格的に始まりまして4年目になります。そういった中で、各自治体の格差、そして、学校ごとの格差、そしてまた、学校の中での格差があるのではないかと。いわゆる学校の中ですと、クラスによって違うんじゃないかというようなお話も聞こえてきます。千代田区としては、ハードを含めて、あと、ソフト面では、全国でも先頭を切っているのかなというふうには思うんですけども、この辺まだ格差があると言われていることに対しては、今後も格差がないように、少なくとも千代田区の中では格差が起きないようにやっていきたいというふうに思います。

そのために何点か、初任者を含めICTの研修をしたり、そして、転入者に対しての研修を行ったりということで、異動によって、また、年度が替わることによって、指導力が落ちてこないような形で工夫をしているところがございます。

それから、今年度から、保護者や地域の方々にICTを活用した授業実践を公開するとともに、意見交換会や講演会などを行う「ちよだスマートスクールの日」を各学校で実施していただいているところです。

また、近年、話題にもなっています生成AIの急速な発展。本区でも、教員研修などを実施しておりますけども、これについての有効な活用についても、今後、考えていきたい。今後と言っている間にどんどん進んでいきますが、ぜひこの辺についても早期な対応をしていくべきだと思っています。

それから、千代田区では、九段中等教育学校がリーディングDXスクールの指定校になっております。様々な事例を持ち合わせ、教員の質、それか

ら、子どもたちのレベルもかなり上がってきています。その取組は、全国からも注目されているところです。この取組を先行事例としながら、全国への横展開はもちろんのこと、区内小中学校もしっかりといい事例を学んでいながら、ついていければ大変ありがたいと思っているところでございます。

第1回目ということですが、この夏休み、夏季休業が終わり、2学期から本格的に各学校の教育課程が実施されます。ぜひこのICTの推進におきましても、委員の先生方をはじめ、各学校でしっかりと進めていただければと思います。

本日はそれぞれの委員の方々のお立場で忌憚のないご意見をいただきまして、また、我々の施策に、また、各学校の施策に生きていけば大変いいかなというふうに思います。

結びになりましたが、皆様のご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げて、挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

委 員 長

ありがとうございました。

教育長は、次の公務のため、ここで退席をさせていただきます。

続いて、委嘱状の交付を行います。既にお手元に委嘱状を置かせていただいておりますので、そちらをご確認ください。よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

次に、本日配付資料の確認をさせていただきます。本日の配付資料は、先ほどご確認いただいた委嘱状のほか、資料1、次第の下段に一覧が記載されておりますので、ご確認いただき、不足している資料がありましたら、事務局へお申し出ください。

オンライン参加の委員の方々には、事前にデータを共有させていただいております。皆様、よろしいでしょうか。ありがとうございます。

続きまして、次第の1、委員の皆様のご紹介ですが、お配りしております資料3の委員名簿をもちまして、紹介に代えさせていただきます。

また、本日、今年度第1回ということもありますので、委員の皆様から一言ずつ、ご挨拶をいただければと思います。名簿の上の順番に、簡単に自己紹介をお願いできますでしょうか。

それでは、信州大学の佐藤先生よりお願いいたします。

佐 藤 委 員

皆様、おはようございます。信州大学の佐藤でございます。本日はよろしく願いいたします。

神田一橋中学校様には、継続して訪問させていただいております。少しずつ、先生方がクラウドを活用した個別最適な学びに進んでいるとか、あるいは本校の先生方が先進校を伺って授業実践を高めていこう、そんな姿を見ているところでございます。そんなお話も、今日できればと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

委 員 長

ありがとうございます。

三井先生、お願いいたします。

三 井 委 員

皆様、おはようございます。山梨大学教育学部の三井一希と申します。本

日はどうぞよろしく願いいたします。

千代田区は、学校情報化先進地域に認定されております。大変、全国でも注目されているところですので、そんな中で、さらに千代田区の実践が前に進めるようなお手伝いできればなと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

委員長 ありがとうございます。

次に、原会長、お願いいたします。

原委員 お茶の水小学校・幼稚園児童保護会の会長の原と申します。どうぞよろしく願いいたします。

お茶の水小学校は、今年の4月から新校舎での学校の運営が始まりまして、いろいろと環境が大分変わるところからの今のスタートになるんですが、後ほど、学校紹介できたらと思います。よろしく願いいたします。

委員長 ありがとうございます。

到着して早々すみません。杉山委員、自己紹介をお願いいたします。

杉山委員 すみません、遅くなりました。麴町中学校地域コーディネーターをさせていただいております杉山と申します。本日はよろしく願いいたします。

委員長 よろしくお願ひします。

次に、岡野会長、よろしくお願ひします。

岡野委員 昨年に引き続き、本年もよろしくお願ひいたします。九段中等教育学校保護者会の会長をしております岡野と申します。

学校の現場で起きていることを、皆様のこの場で、私が伝える役目が1つの役目だと思っておりますので、子どもたちの声を伝えられるようにしっかり頑張っていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

委員長 ありがとうございます。

次に、小牧校長先生、よろしくお願ひします。

小牧委員 おはようございます。富士見小学校校長の小牧でございます。オンラインで失礼いたします。

先ほど教育長のお話にあった学校間格差、学校内の格差ということに関しまして、学校間においては、区の授業研究を通して、ICTの利活用を学校間で共有しているという状況でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。以上です。

委員長 ありがとうございます。

次に、盛谷校長先生、よろしくお願ひいたします。

盛谷委員 神田一橋中学校校長の盛谷と申します。どうぞよろしくお願ひします。

先ほど信州大学の佐藤先生のお話にもありまして、今回の研究をして3年目になりました。非常に成果もありますし、課題の部分もあります。そういうところを、2月の研究発表会のときには、区内の先生方に向けて発表させていただいて、今後、区全体でICTを活用した教育が進めていけるようにしたいと思ひております。どうぞよろしくお願ひします。以上です。

委員長 ありがとうございます。

野村委員 続きまして、野村校長先生、よろしくお願いいたします。
おはようございます。九段中等教育学校の野村でございます。よろしくお願いいたします。

委員 先ほど教育長からも話がありましたけれども、リーディングDXスクールの指定、これ、生成AIを活用した取組ということでの指定と、それから、教育DXハイスクールへの指定、そして、E-Assessmentに関するもの、情報教育に関して3つの指定を受けております。それに伴い、いろいろな取組を行っておりますので、またご紹介できればと思います。

委員長 あと、名簿の職名ですが、校長になっています。正しくは統括校長の職名なので、よろしくお願いいたします。

委員 ありがとうございます。失礼いたしました。

委員 次に、改めまして、教育担当部長の大森と申します。

委員 この会の議論の積み重ねを、様々な施策に反映させていただきたいと考えておりますので、ぜひ活発な議論を進めさせていただければと思っています。よろしくお願いいたします。

委員 続いて、上原委員、よろしくお願いいたします。

委員 子ども部指導課指導課長の上原でございます。本年度より、指導課長に着任いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

委員 各校、区の施策に基づいて、また、それぞれ特色をもってしっかり取り組んでいただいているところですが、その中でより推進していくために、この委員会があるかと存じております。

委員 ここでいろいろなご意見をいただいたところを、また政策等に反映できればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

委員 ありがとうございます。

委員 では、続きまして、副委員長の選任に移らせていただきます。項番2でございます。

委員 委員会の設置要綱の規定では、副委員長は委員長が指名するとなっておりますので、昨年度に引き続き、富士見小学校の小牧校長先生にお願いしたいと思いますが、小牧校長先生、いかがでしょうか。

委員 よろしくよろしくお願いいたします。

委員 では、副委員長は小牧先生にお願いいたします。

委員 では、次第の項番3、令和6年度1学期の取組報告について、事務局からご報告をいただき、その後、委員の皆様から補足説明やコメントなどをいただければと思います。

委員 では、事務局、よろしくお願いいたします。

指導主事 それでは、事務局の相場から、令和6年度1学期の取組報告をさせていただきます。

委員 昨年度末に開催いたしました本委員会において、改めて情報モラルを高めていくことが必要である旨のご意見をいただきました。

委員 そこで、今年度初めに、情報モラル教育強化月間を設定いたしました。実

態調査で低下していた設問項目の事例を、事例で学ぶN e tモラルのアプリケーションやG I G Aワークブックとうきょうからピックアップし、発達段階に合わせて各学校で取り組みました。

4月、昨年度、初開催いたしました、初任者、異動者を対象としたI C T研修を今年度も実施いたしました。今年度の対象者は40名で、意義がある研修だったと感じております。

また、今年度から区の施策として、「ちよだスマートスクールの日」を各学校で設定し、保護者や地域の方々にI C Tを活用した授業公開をするとともに、講演会や意見交換などをする取組を行っています。写真の学校の講演会では、130名を超える参加がありました。

情報教育主任研修会では、文部科学省のG I G A S t u D X推進チームの平井先生から、静岡県吉田町の取組について伺いました。お話を伺いながら、クラウド環境で思考ツールを活用し、子どもの学びと教師の学びは相似形であることも体験いたしました。

情報主任や幼稚園教諭の初任者、希望者を対象に、生成A Iで何ができるのか、どんなリスクがあるのかを学び合いました。受講者は、便利であることを実感し、正しく安全に、まずは校務からたたき台、アイデア出しに活用していきたいとの感想が聞かれました。

また、先週ですが、情報活用能力育成を目指した子ども向けのイベントを開催いたしました。初の試みでしたが、とても反響があり、募集から約2時間で定員に達し、急遽、枠を増やす対応を行いました。

九段中等教育学校では、昨年度に引き続き、リーディングD Xスクール指定校として取り組んでいます。愛知県、石川県、山口県など、全国から視察を受け入れている状況です。

また、その取組の様子はテレビでも紹介していただいたところです。

事務局からの報告は以上です。

委 員 長

ありがとうございました。

それでは、校長先生方から補足説明や各学校での取組などの報告をお願いできればと思います。

初めに、野村校長先生からお願いいたします。

野 村 委 員

今、事務局からもご紹介ありましたが、リーディングD Xスクールの指定を受けて、生成A Iを授業で活用する、あるいは校務で活用するというも行っています。

本校の生成A Iですけれども、いわゆるC h a t G P Tというようなものではなくて、企業と連携をして学校独自の生成A Iという形になっています。この生成A Iは、学校の中の情報は外へ出ていかない。ただし、生成A Iを活用するときに外からの情報は入ってくるということで、個人情報が入って流出するということがないような形での契約となっています。

また、C h a t G P Tですと13歳を超えないと活用できないんですけれども、本校で使っているものは、その年齢的な制限がないので、自由に生徒が

全員活用できるという形になっております。情報の教科だけでなく、国語や世界史などの授業でいろいろ取り組んでおまして、そういったことが認められて、教育家庭新聞に掲載されたり、あるいは東京都の教職員研修センターで、本校の教員が3名ほど講師として、その取組について説明をしたりしているというようなことを行っています。

ただ、本校、今、ちょうどシステムを交換する時期で、後期になればよりもっと取り組んでいけるかなと思っておりますけど、今のところ、なかなかやりたいことができない状況ではあります。もう間もなく新しくシステムになりますので、そうすると、より一層進んでいくかなと思っております。

以上です。

委員長 ありがとうございます。

次に、盛谷校長先生、お願いいたします。

盛谷委員 ありがとうございます。2点、お話しさせていただければと思います。

まず1点目なんですが、教員の働き方改革に関わるICTの活用のお話です。

後ほど、アンケート、データが出ると思うんですが、ICTの活用で研究を進めている関係で、先生方のスキルの部分だったりやる気の部分だったり、非常に高いです。クラウドの活用というのを最初の年にスタートしていますが、今、学校よりも世の中の方がDX化がかなり進んでいて、ちょっともう多少追い越されている感がありますし、生成AIは、まず、そこに追いついていないかなというのが正直なところなんです。クラウドの活用などは進んでいるんですが、生成AIをどう校務の上で活用するかとか、成績の処理についてどう活用するかというところについては、まだこれからかなという感じがします。

先ほど、生成AIのセキュリティーの部分も出てきましたけれども、そういうのをしっかりと担保しつつ、その中で先生たちが安心して活用できるような環境をいかに区全体で整えていくのかというのは、大事なところかなというふうに思っています。それが1点目です。

2点目ですが、授業でICTを活用して協働的な学びや個別最適な学びというのは、研究も含めて進んでいるところだと思います。

また、成果と課題については、先ほど言いました2月の発表でさせていただければと思います。

今日は、生徒及び教員の方のアンケートの話をちょっとさせてもらえればと思います。個別最適な学びを授業に取り入れていることについて、どういうふうに考えるかというアンケートを取ったところ、かなりの割合で興味、関心が高いというのがありました。なので、生徒もそうですけど、教員の方もこの取組については非常に前向きに捉えているかなと思ってます。

ただ、一方で、個別最適な学びなので、それぞれの生徒が自分のやり方で自分のペースで学習を進めていくんですけど、その中で知らないことに対して、課題について学ぶとか、難しい課題についてどう取り組むかというところ

ろが、やっぱり生徒もそうですし、教員の方も多少力の差というところもありますし、そういう幅が出てきているというのがアンケートからも読み取れるかなと思います。割合として低いわけではないんですが、先ほどの興味、関心のところと比べると、やはり自信のない部分もあると思いますので、今後、その部分を生徒もそうですし、教員の教え方の部分も向上させていかなきゃいけないのかなというふうに思っております。

以上です。

委員長 ありがとうございます。

ここまでの話を受けて、学識経験者のお二人から指導やアドバイス等をいただきたいと思います。お一人、大体10分程度でお願いできればと思います。

初めに、佐藤先生、お願いいたします。

佐藤委員 よろしくお願いいいたします。信州大、佐藤でございます。先生方のお話をお聞きした上で、少しだけ情報提供という形でお話をさせていただきます。昨年に引き続き、どうかよろしくお願いいいたします。

さて、先ほど相場先生から、情報活用能力とか情報モラル教育のお話がありましたけども、文部科学省でこういう意見交流会が行われたことがあって、その資料だと、学校現場に情報活用能力が十分に理解されていないというような、そんな指摘がございます。最近、私もある研修会で比較的情報教育やICTに明るい先生方ですね、そういう先生方に情報活用能力って説明できますかって話をしたところ、うん、あんまりできていないですね。学習指導要領には何て書かれていますかとか、そもそもどういう力なのかということに関して説明ができない。比較的明るい先生方にもかかわらず説明ができないということは、じゃあ、明るくない先生方とか苦手な先生方には、多分、ほとんど伝わっていないんじゃないのかなというような、そんなことを感じた次第です。

ですから、何か千代田区様のほうで実践を進めていく上では、少なくとも管理職であったりとかカリキュラムをコーディネートする方々ですね、そういう方々には情報活用能力というのはどういうものなのかということ、ぜひ説明できるような、そんな体制を整えていただきたいというのが、私からのお願いになります。

さて、学習指導要領では何て書かれているのかという最初の問いなんですけども、非常に大事なことの1つとしては、学習の基盤となる資質、能力というふうに位置付けられております。学習の基盤というくらいのお話をするわけですから、教科の資質、能力を育成するときに発揮されていく、それと同時に育成されていくような、そんな力であるというような認識をもつ必要があるのではないかというふうに考えております。

ですから、情報活用能力が発揮されていない状態での、各教科等での学習活動というのは、実は、学習指導要領を達成していないのではないかと思います。な疑問をもつ必要もあるんじゃないかというふうに捉える必要があります。

情報教育というのはどういうふうに整理されてきたかという話なんですが、3観点8要素というふうに整理がされています。情報活用の実践力、それから、科学的な理解、社会に参画する態度というふうになっています。

先ほど九段中等様が生成AIのお話をされていましたが、例えば、じゃあ、生成AIを使うときには、この3観点でいうとどういう力を育ておけばいいのかという話になってくるので、そうなってきますと、小学校段階ではどこを何しておけばいいとか、中学校段階ではどうしておけばいいというふうな、そういった整理もしていく必要があるのではないかというふうに捉えております。

そもそも子どもたちって情報を読めるのかどうかというのは、私の興味関心で研究テーマなんですけども、比較的以前から、子どもたちはきちんと情報を読解できないというような話が言われてきております。例えば何ができていないかという話ですけども、まず1つ目は情報を探すということができていないというふうに言われております。情報が複数になってくるとさらに難しいというようなのが、我が国の特徴です。例えばグーグルを活用した検索ですけども、各国、入力する検索キーワード、どのぐらいの入力の数なのかということ調べているらしいんですけども、日本はキーワードが1個か2個らしいんですね。対して、OECD諸外国はもっと多いらしいんですね。4個も5個もキーワードを打って、的確に情報を検索するということですね。そんなことを考えていくと、ここにもつながってくるわけですけども、検索をするときにはキーワードが必要で、そのときに発揮されなきゃいけないのは言語能力なわけですね。ですから、言語能力とともに情報活用能力という関係性みたいなことを、ぜひ検討していただきたいなというふうにも思います。

それから、生成AIの活用に関わっていくと、評価するとか熟考するという話が日本は弱いと言われております。質や信憑性を評価するということですね。それから、矛盾を指摘できるとか、そんなような学習をしていかないと、生成AIが生成した情報に対して、どうアプローチするかというところで1つ懸念が出てくるということですので、そういった学習活動がどの程度されているのかということは、結構大事なことなんじゃないのかなというふうに捉えております。

加えて、個別最適な学び等に関わってになってきますけども、日本のこのICT活用に関しては少しずつ改善されているというふうには言われているんですけども、相変わらずの場面でいいますと、探究とかPBLとかという場面でICTが活用されていないというふうに出ています。ですから、例えば総合的な学習の時間や探究の時間に代表される場所だと思えますけども、そういう場面でなかなか使われていないということだと思えますが、社会一般では、問題解決のときにICTを使うとか、あるいはここでいいますと、データを集めて記録するとか、それを処理するとか、何かを分析するとか、プレゼンテーションするとかということ、実は、そんなにされていな

いという話ですね。

ですから、それが1つあるのと、もう一つは自律的な学習を行うときに、子どもたちは一人でできますかということに対して、なかなかできないということをおっしゃっています。これは、OECD諸国で、37か国中34位とされています。1つ言えることは、我々の子どもというのは先生がいれば学習ができるけども、先生がいなければ学習ができないということを中学3年生が申し上げているということですね。例えばここでいうと、自分の学習の進み具合を評価する、これが評価できない、誰かに評価されたら次に進めることはできるけども、そうじゃないということですね。そんなふう考えたときに、本区では何ができるのかみたいなことが議論されていくといいのではないかとこのように捉えているところがございます。

最後になりますけども、校務の情報化の話も先ほど少しあったと思いますが、専門家会議のほうでは、まだまだこのくらいだということになります。例えば職員会議等のペーパーレス化ということがそこそこ進んでいるというデータがございますけども、実際聞いてみますと、まだまだPDFでやられているというような言い方がされています。このPDFでされるということは、パソコン上で印刷しちゃっているという意味だということに捉えていいんじゃないかなと思います。そうじゃなくて、クラウドでURLで共有する、ファイルで共有するものではないのだというようなことをやっていかないと、多分デジタルトランスフォーメーションということであったりとか、あるいは働き方改革という観点では進んでいかないのかなというふうに思いますので、本区がどのくらい、どのように職員会議がされているのか、何が共有されていて、どのように働き方が変わっているのか。時間だけでなく、実質、どのようにDXしているのかということも調べていく必要があるのではないかとこのように捉えております。

私からの話は以上になります。よろしくお願いたします。

委員長 佐藤先生、ありがとうございました。

続いて、三井先生、お願いたします。

三井委員 よろしくお願いたします。改めまして、山梨大学の三井一希と申します。

私は、授業の設計とか、学びにおけるデジタル化みたいなことを専攻としている者ですので、その点から少しお話をさせてください。

千代田区の取組、大変興味深く聞いておりました。異動者を対象にした研修ですが、スタートをそろえるとか環境の違い、3つあるOSで、今後千代田区に来た人が迷わずにスタートが切れるといった取組、昨年度からの取組とおっしゃっていましたが、とてもいいなと思ったので、ぜひこの活動を継続していただきたいなと思いました。

また、この「ちよだスマートスクールの日」ですね、これによって、保護者とか地域へ知らせ、保護者や地域を味方につける、学校を応援してもらうという意味でも、積極的にこういったものを見せていく。この日だけやっ

ぱり見せても駄目だと思いますから、ぜひ日頃からやって、こういったことは現場でやっているんですよ、今日はその一部を見せますみたいな形で継続をしていただくといったことが、保護者の理解とか地域の方の理解を深めることにつながるのかなということを思って聞いておりました。

また、生成AIの研修ですよ。もうこれからの教員にとって必須のスキルだと思います。校務では先生方がどんどん使って、効率的に働くことも必要ですし、今は一部の学校だけかもしれませんが、いずれ小学生も中学生もこういった生成AIを使って授業で学んでいく、それは子どもたちが今インターネット検索を使って授業を行っていると同じぐらい、きっと普及してくるものだと思いますので、ぜひ先生方のスキルを高める、そして、意識を高めるということの継続をお願いしたいなと思っております。

また、こちらのほうですよ。すぐに定員が埋まってしまったということで、やっぱりこうやっていると色々な面から児童・生徒の情報活用能力、先ほど佐藤先生のお話にもありましたけど、子どもたちの情報活用能力の育成をバックアップする、これは授業だけではなくて、このようなイベントとか家庭の環境とか、いろんなところから子どもたちの情報活用能力の育成をバックアップできると思いますので、また、今回はプレゼンでしたけど、きっと情報活用能力ってプレゼン以外にもたくさんあると思いますので、じゃあ、今年度はこれを重点的にとか、じゃあ、来年度はこれをやっていこうとか、逆にこれは子どもたち、力弱いから継続してやっていかなきゃみたいところで、どんな手を打っていくのかということ、またご検討いただければと思います。

ここから少し話を替えまして、こちらは今年度の全国学力・学習状況調査の結果になります。質問紙の一部なんですけども、これ、何かというと、学校に行くのが楽しいですかという質問項目ですね。左側が小学生、右側が中学生なんですけど、この質問項目に個別最適な学び、協働的な学びに取り組んでいますか、というのをクロスした結果になります。一番上の個、丸、協、丸というのは、個別にも協働にも取り組んでいると見てください。下は個、バツ、協、丸が個別にはあまり取り組んでないけど、協働には取り組んでいる、個、丸、協、バツ、どっちもバツというふうに見るんですけども、ここから何が分かっていくかというと、個別最適な学び、そして、協働的な学びの両方に取り組んでいるグループ、そのグループが小学生も中学生も最も学校に行くのが楽しいと回答したといったことが見えてきました。これ、何で文部科学省はこういったクロスをしたんだろうかというところの意図を酌み取る必要があると思いますし、これが子どもたちの声なんではないかなと思います。そう考えた場合に、当然、千代田区の先生方の授業スタイル、引き出しを増やしていく必要があると思いますし、こういったものの結果を注視して、それを授業の中身に反映させていくということが今後必要になるのかなと思います。

同じく今年度の全国学力・学習状況調査の、中3国語と中3数学の結果に

なります。これは発表する場面でのICT活用頻度が、生徒に影響するといったものになります。濃いほうが、ICTを活用した発表頻度が週3回以上かつ課題解決の学習をよく行ったです。薄いほうが、ICTの活用が週3回未満かつ課題解決を行わなかったとなっています。年度で差が出ていることが分かると思います。

これって、じゃあ、ICTを使えばいいのかということなんですが、それだけでは駄目だと思うんです。発表の際に子どもたちがプレゼンテーションソフトを使って作って発表するみたいなことはやっていると思うんですけど、でも、それだけではやっぱり不十分ではないかというところですね。そこにプラスして、課題解決の学習を組み合わせるという視点がやっぱり大事ですし、先生方も活用させて終わりではなくて、発表をすることも大事なんですけど、でも、それだけじゃなくて、課題解決的な視点の中で授業をつくっていくということがあると思います。

この全国学力・学習状況調査に関わっては、よくいうCBTに移行してまして、これはスケジュールが公表されていますので、確実にこうなります。2025年は中学校の理科、26年、中学校の英語、そして、27年が小・中の国語、算数といった形で進んでいきます。これ、子どもたち対応できるんだろうかみたいなのをぜひ考えていただいて、紙の教科書とかだけだと、やっぱり画面上から情報を読み取るとは変わってくる、認知も変わってくると思いますので、日頃から、端末上からきちっと情報を読み取っていかるとか、端末上に自分の考えを打てるとか選べるとか、そういった経験を存分に積んでおかないと、テストで実力を発揮することすら難しくなってくる時代が、もう目の前に来ています。ただ、タイピングスキルとかはそうですよね。これ、中学生なんですけども、これでいいんだろうかみたいなのを本気でやっぱり考えていかないと、片手で打っている状況です。そういった場合が、もし要るのであれば、こういったところとかもやっぱり心配になってくると思います。

高校入試はまだCBT化は言われていませんけど、いずれこういったことを行っていくと思いますし、大学入試もいずれこういったことが検討対象になってくると思います。私は普段、大学生に授業していますが、タイピングのスキルはあるのが当たり前で、その先に何ができるか。まさに本当に息をするようにタイピングできるような児童・生徒であってほしいと思います。そういったことが、本当に考えることや表現することにつながってくるといいますので、いま一度、全校で、本当に子どもたちって鉛筆で書くより速いぐらいのタイピングスキルをもっているだろうかとか、何の苦もなくタイピングできるだろうかみたいなのを見て、不十分があれば、ぜひそこを重点的に取り組んでいるということも忘れずにやってほしいなと思っています。

千代田区、リーディングDXスクールの指定を受けていると思います。このリーディングDXスクール事業の考え方を、ぜひ千代田区内に横展開して

いくということが大事だと思います。これからの日本の学校教育の中でとても大事な視点が、このリーディングDXスクールの事業趣旨のところに書かれています。これを指定校が取り組んで、それを千代田区、そして、東京都、そして、全国に広げていくということですので、ぜひ各校、もうここに書かれていることを意識するということがまず大事だと思います。

それは何かというと、赤線のところなんですけど、GIGA端末の標準仕様に含まれている汎用的なソフトウェアのクラウド環境を十全に活用するということですね。活用じゃなくて、十全に活用って書かれていることがポイントなんだと思います。まさに、基盤となっているということですね。こういった環境、基盤の上に学びを進めていく。どんな学びかということ、先ほどのお話にもあった、情報活用能力の育成を図りながら、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、そして、校務DXを行うということが書かれています。この考え方は、ぜひ区内に広めていってほしいなと思います。

また、授業だけではなくて、子どもたちが日常でどれだけ使っているかみたいなことも大事ですよね。先生の指示の中で使っているだけじゃなくて、自分たちで係活動をよくしたいとか、委員会の中で使いたいみたいな中で、どんどん表現していくみたいなことが当たり前に行われるような学校になっていってほしいなと思っております。

また、こういったものを使うことで、例えば先生が常に説明するだけじゃなくて、分かりやすい説明動画を作って、自分が見たいタイミングで見られるとか、もちろん直接指導することもあるけども、でも、こういったものの完成にも目を向けて、より子どもたちがやりやすい環境を整えていく、まさに授業をどう改善していくのかということに注力をしていってほしいなと思っております。

私からは以上です。

委員長 三井先生、ありがとうございました。

ここまでの話を受けて、保護者代表の方々から感想、ご意見、アドバイスなどのお話を伺えればと思います。

初めに、原委員からお願いいたします。

原委員 お茶の水小学校のPTAの原と申します。

お茶の水小学校は、今年の4月から新校舎になりました。それで、よりICT教育に取り組みやすい環境になりましたので、本当に感謝しております。もう6年生の児童たちも、デジタルネイティブの世代ですので、しっかり新しいものに触れていくということで、本当に感謝しております。

また、タブレットを配付していただいたことによりまして、当初予定しておりましたパソコンルームがなくなりまして、そこの部屋を多目的ルームとして運用できることになりました。多目的ルーム、体育館よりは狭い、何ていうんですかね、広くなくていいような会合とか、あとプロジェクターとか、そういうのも完備しておりますので、保護者の集まりですとか健康診断ですとか、そういうふうなスペースを生かすことができしております。物理的

なスペースが生まれたということも、大きな功績ではないでしょうかと思っております。

ただ、ちょっと最近、散見されるのが、児童と保護者が、今、サーフェスを配付していただいているんですが、やっぱり区から無償で提供されているという認識があって、しっかりもう少し管理を責任をもってほしいなというところがありました。例えば、雨にぬれて少し壊れてしまったりですか、ランドセルに入れっ放しで充電ができていないとか、もう少ししっかり家でもメンテナンス意識をもっていただけたらいいなと思います。

また、ちょっと立ち上がりが遅かったり動作が遅い端末だという意見も聞いておまして、暗かったりすると顔認識ができなかったりとか様々あったり、少し、もしそういうちょっとしたディレイが授業を止めてしまったりとか、そういうところがあるようなので、その辺がどのように解決していけるかということも聞いてみたいと思いました。

あと、今年3月に千代田区の教育委員会さんのほうで実施していただきました「ちよだ楽」では、小学校の8校の取組を目の当たりに行うことができました。皆さん、小学3年生から6年生の皆さんで、各学校の児童の皆さんがパソコンを使ってプレゼンをしていただいたんですが、自分が子どものとき、あんなことできなかったということで、すごい感銘を受けました。ああいう発表をする場があると、とても子どもたちのためになるんじゃないかなというところで、いいのかなと思いました。

以上です。すみません。

委員長 ありがとうございます。

次に、杉山委員、お願いいたします。

杉山委員 麹町中学校の地域コーディネーターをしております杉山でございます。お話ありがとうございました。

先ほど佐藤先生のお話の中でとても共感するところがありました。私も業務上、生成AIを結構最近使うようになってきていまして、プレゼンの提案ですとか資料を作ったりというので活用しているんですけど、先ほど佐藤先生がおっしゃった測定する能力というのは、とても大事ななというふうに思います。今後、子どもたちがそういった生成AIを使っていくことについては、生成AI使ったときに、普通に誤った情報とかも紛れてきたりすることがあったりするんで、そういったことは、そこをどう判断していくか、見つけていくか、何が正しいかというのは見付けていく力をやっぱり身に付けていかないといけないなと感じております。おっしゃっていた質と信憑性を評価する、矛盾を見付けることというのがとても大事だと思いました。

以上でございます。

委員長 ありがとうございます。

次に、岡野委員、お願いいたします。

岡野委員 皆様、ありがとうございます。3点お話ししたいと思います。

まず1点目が、セキュリティーについてしっかり仕組みを構築されている

という野村先生のお話を聞いて、安心しました。さすがだなと、そんなふう
に思っております。

また、佐藤先生のお話でありました情報の質と信憑性を評価する点に、ま
だまだ弱いというお話も、前回ありましたように、情報のリスクについて学
習したことで、今後どうなっていくのかちょっと楽しみだなと、そんなふう
に思っております。

2点目が、ICTを使って教職員の方々の働き方改革につながっていると
いうのは、本当にいいことだなと思ひまして、ぜひ引き続き、推進していただ
いて、先生方の働き方改革を邁進していただければと思っております。

3つ目が、個別最適な学びについてなんですけど、先ほど、三井先生のアン
ケートを共有いただきました結果のとおり、協働的で個別最適であれば学校
に行くのが楽しいという子どもたちが一番多いというのは、本当にすばらし
い結果だなと思ひますし、ぜひ多くの学校でこれを取り入れていただいたほ
うがいいなと。そのリーダーシップを千代田区に発揮していただけたらすば
らしいなと思っております。

一方で、最後にありました、教師の説明は子どもが知りたいタイミングで
解説動画を見るというお話なんですけど、これについてもすばらしいなと思
いつつも、学びに積極的な子どもとそうでない子どもとで差が生まれてくる可
能性があるな、なんていうのをちょっと懸念しております。前回もお話しし
たかもしれませんが、積極的な子どもたちはどんどんどんどん学びが多くな
って、成長していくんだろうなと思いつつ、主体的に動かない子どもに対
して、先生方のサポートがより重要になってくるなと、そんなふうにも思いつ
つ、先生方の負担をICTで軽減しつつ、こういった負担が増えることに対
しても、何かうまく課題解決ができたらもっとよくなるんじゃないかなと、
そんなふう感じた次第です。

以上です。

委 員 長

ありがとうございました。皆様、様々にご意見いただきましてありが
うございました。

ここまで、令和6年度1学期の取組報告及び意見交換をしていただきました。
た。

次に、次第の項番4、意見交換に移りたいと思います。

初めに、事務局からご報告をお願いいたします。

指 導 主 事

相場でございます。GIGAスクール構想4年目と言われている今年度で
すが、自治体、学校、教員間の格差についても話題になっているところ
です。そこで、限られた時間ではございますが、このことをテーマにしたいと
考えております。

これは、毎年、国が実施している学校における教育の情報化の実態等に関
する調査の本区の学校ごとの結果です。どの学校も全国平均と比べると、ほ
ぼ全ての項目で上回っていますが、ご覧のように、学校間に差があることが
分かります。また、AからDの項目によっても差があることが分かります。

設問は、ご覧の16項目ですが、分析してみると、中でも少し低い項目がこちらの赤い四角の項目です。この設問をキーワード化すると、ご覧のキーワードになるのではないかなというふうに思いました。このキーワードは、どれも今求められているキーワードだと認識しているところがございます。

この後、意見交換できたらと思います。事務局からは以上です。

委員長 ありがとうございます。

ただいまの事務局からの問題提起とご説明を受けて、順番にご意見、ご感想などいただきたいと思います。

まずは、校長先生方からお願いいたします。

初めに、盛谷校長先生、お願いいたします。

盛谷委員 ありがとうございます。先ほど少しお話をさせていただきましたが、本校のデータに着目すると、割と高い状況です。理由は、やはり研究について取り組んでるという期間が長いというのがありますので、それを授業にどう生かしていくかというところの視点で、割と高い数値かなというのを思っています。そう考えると、ほかの学校さんも授業に対する取り組み方であったりとか、どう活用するかというところが、本格的に進んでくると、ここのパーセンテージも上がってくるだろうなという気持ちはあります。

ただ、本校もそうなんですけど、先ほどの指摘のとおり、Bという軸の、ICTを活用して指導する能力というところについては、若干、本校も低く出ている部分がありますので、これもやっぱり生徒に対する指導のところもそうですし、手応えの部分というところもなかなか全員が全員、生徒さんが反応を見せていないとか、体質的な差があるとかというところから、やはり教員自身もまだまだ自信をもってというところまで行き着いていないのかなという、ちょっと手応え的なものがあるかなと思っています。

また、協働的な学びや個別最適な学びというのを続けているんですが、まだ教員の指導の引き出しという部分を、まだまだこれから増やしていかなきゃいけない状況になっていますので、そういう意味では非常に教員というのはもちろん真面目なので、どこを達成の目標にするかというところで、またこの評価の部分も変わってくると思うんですけど、それぞれの先生方がより、先ほどの話のとおり、生徒の反応もいいし、自分自身の引き出しも増えて、こういった活用を促進するような授業が割とスムーズに展開していくようになってくると、さらに割合として高くなっていくのかなと思っています。

以上です。

委員長 盛谷校長先生、ありがとうございました。

続いて、野村校長先生、お願いいたします。

野村委員 格差ということで、学校間あるいは教員間の格差というところかなと思いますけれども、教員の情報に関するリテラシー等々が、ここももう格差があるのはあるんですけども、これらについては、教員側としてもある程度みんなができるようになってから使ってほしいというような意見が多いんです

けれども、私のほうでは、そうではなくて、波紋効果と言っているんですけども、池に点々というような波紋が広がっていくように、その点がいくつかあったら、それでどんどんどんどん広がっていくだろうということで、分からない人はどんどん吸収をしながら聞いたりして、やっていけばいいんじゃないかというようなことでやっています。当然、学校でも校内研修等取り扱ったりしておりますので、徐々に教員の能力も上がってきているところかなと思います。

それから、もう高校生になってくると、活用能力が大分高いので、逆に、例えば意見収集しようといったときに、先生、じゃあ、私が枠作るから、そこにどんどん意見を入れてもらったらどうということ、生徒がもう積極的にいろんなものを作りながら、そこで意見集約するとか、何かつなげたりとか、先生が活用できない部分は高校生がフォローするというような、それはそれでいいのかなと私は思っているんですけども、そういった効果も出ているのかなと。

それから、先ほど評価というような観点、ちょっと出ていましたけれども、例えば生成AIでどれだけ正しい情報を得るのかというのは、生徒がどんどん試したりしています。例えばキーワードをどういうふうに打つとどういいう答えがあつて、それで、正しい情報はどいういったものなのかということで、生成AI、前回、私、話をしたかと思いますが、生成AIは対話力だということです。その対話力とともに、質問力ですね、質問力の向上というのが必要になるかとは思いますが、例えば生徒がリンゴの絵を生成AIに描かせると。その中で、キーワードをどういうふうに打つとどんな絵になるのかということから、じゃあ、どいういった問いを立てないと自分が思い描くリンゴにならないのかとか、あるいは感想文を書くにしても、どいういったキーワードを入れることによってより正しい情報あるいは自分が求めるような回答になっていくのかなということを試したりはしていますので、どんどん生徒の能力もそういつたところから高まってくるのかなとは思っています。

あと、今後に関してですけども、教員が例えば試験問題を作るときに、今まで1日かけていたのが、もう1時間ぐらいで作成する。当然、それは点検は必要になってくるんですけど、そういつたことを言っています。ただ、その精度を上げていくためには、まだまだこれから研究をする余地はたくさんあるなと思うんですけども、そのうち生徒も自分で試験問題を作って解答することで対策をするというふうなものも出てくるのかなと思いますけれども、教員間格差については、そういつたところをお互いに協力しながら埋めていくということが大切なんだろうなと思つております。以上です。

委員長

野村校長先生、ありがとうございます。

次に、保護者代表の方々からもご意見等いただければと思います。

まず、岡野委員からお願いできますでしょうか。

岡野委員

はい。ありがとうございます。まず、本区のICT活用指導力の状況につ

いて、相場様からお話がありましたとおり、全国平均を基本的に上回っているというところで、さすがだなと、そんなふうに思っております。

先生方の間で活用できている、できていないという差が開くのは仕方ないと思いますし、この差が少しずつ縮まっていくのかなとも思っております。先ほど、野村校長先生からありました波紋効果で進めているというところも、素晴らしいことだなと思いながら聞いておりました。

もしやっていなければ、1つやっていただきたいなと思ったのは、先ほど、三井先生からお話ありました個別最適な学習と協働という掛け算をしていると、子どもたちは学校に行くのが楽しくなるという、このアンケート結果を、ぜひ全先生に共有していただけたらいいなとそんなふうに思いました。そうすると、ああ、子どもたちはしっかり学校に行くのが楽しいと感じてるんだ、このやり方で合ってるんだという、先ほど盛谷校長からありました手応えの部分も感じていただけると、より先生方の前向きな取組につながっていくのかな、なんていうふう感じつつも、期待したいなと、そんなふうに思っております。

以上です。

委員長 ありがとうございます。

次に、杉山委員、お願いできますでしょうか。

杉山委員 私もこのグラフを見て、やっぱり千代田区の先進的な取組というのがここに表れているのだなというふうに思いました。こういったICTの活用によって、先生方の業務の負担ができるようになれば、これからもいいのかなというふうに思っております。

それから、あと、生徒たち、こういった使い方というのは、使うことについては得意な子が多いと思うので、どんどん使ってもらって、存分に活用していただきたいと思います。ただ、反面、こういったICTを活用することが苦手な生徒もいると思うので、こういった子たち、生徒たちの手助けというのも先生方にはぜひお願いしたいなというふうに感じております。

以上でございます。

委員長 ありがとうございます。

続いて、原委員、お願いできますでしょうか。

原委員 そうですね、先ほど佐藤先生がおっしゃっていた情報活用能力をどのように生かしていくかということで、やっぱりそこは言語能力の向上が求められているんだなということを感じました。そのことによって、どのようにこのツールを使っていくかということが問題解決の力を養っていく、力を磨いていったのが、この中で磨いていければいいんじゃないかなと思いました。なので、先生方のご負担もちょっとまた上がってしまうのかなという心配もあるんですが、保護者も協力して、そのように家でもできるような形でやっていければなと思いました。

先ほど、三井先生からキーボード入力を片手でやっている事例紹介があり

ました。まだ慣れない時期はしようがないのかなと思ったんですが、タッチタイピングができるとまたすごいICTに触れるのも楽しくなるんじゃないかなと思いますので、ちょっと私も全然苦手なんですが、そのような授業ももしあるのであればやっていただければなというふうに思います。そういうことによって、格差が少し減っていくんじゃないかなという思いもしました。

以上です。

委員長 ありがとうございます。

それでは、ここまでの話を受けて、学識経験者のお二人からご指導、ご助言いただきたいと思います。お一人10分程度でお願いできればと思います。

初めに、三井先生、お願いできますでしょうか。

三井委員 はい。では、私のほうから少しお話しさせていただきたいと思います。

千代田区のデータからも格差があるみたいなお話があったかと思いますが、私もいろんな学校、それから地域に関わることがございますが、基本的な状態として格差がないところはないんじゃないかと感じております。どんな地域、学校においても、多かれ少なかれ格差はあるわけですね。それを認めた上で、受け止めた上で、それをいかに埋めていくのかというところの、今日、議論ができればな、なんてことを思っております。

今、画面にお示ししているのは、イノベーター理論と呼ばれるものです。これは何かというと、組織の中でどういうふうな立ち位置に人がどれだけいるのかみたいところです。これは、左側から革新者と呼ばれるところ、初期採用者、初期多数派です。左側のほうは、新たなものに対して比較的順応しやすい集団を表しています。右側半分のほうは、後期多数派、遅滞者ですね。この遅滞者というのは、なかなか変えようとしないとか、新しいものをなかなか取り入れようとしないとかいう者が一定数いるといったことですね。そういったものとは反対に、革新的に取り入れる人とか比較的早く取り入れる人って一定数いて、少し遅れるけどもいずれ取り入れていく人とか、いろんな状態があるといったことを示しているものなんですけども、例えばこれって、革新的に取り入れる人って2.5%ぐらいのウエートですね。これ、40人の職員で1人ぐらいなんですよ、割合でいえば。初期採用者というのが40人の職員だと5.4人。それ、考えてみると、もちろんどの集団にも当てはまるというか、これは集団組織としての考え方というか、いろんな人がいるといったことを前提の中で、じゃあ、どういうふうにこの格差を少しずつ埋めていくのかというようなどころに行くんじゃないかなと思います。まず、どの組織にも、どの地域にも、どの学校にも格差といったものは多かれ少なかれあるというところなのかなと思います。それが、その人の教育観であるとか今までの経験であるとか、いろんなものが複合的に関わっていくので、原因を特定することは難しいんですけども、でも、右側の例えばこの図でいったら、後期多数派、それから遅滞者みたいな人を少しでも左側のほうへ入れていくために何ができるかということだだと思います。

その中の1つは、やっぱり、できる人からどんどん進めるということですね。ちょっと一昔前の考え方で、みんながそろってからせえのでスタートするみたいなことではもうなくて、できる人からどんどん進めてみて、できる人からやってみて、それを校内に広げていく、地域に広げていく、時間がかかるけど、そこにだんだんだんだん追いついていくということがあるのかなと思います。

そのための1つとして、例えばICT機器を使ってどんな活動をしているのかといったもののこれは調査結果になりますけども、比較的多いのは学習内容について調べるですね。これは小学校も中学校も高校も一番上にあるところです。だから、先生方はこういったことで比較的イメージが付きやすいんじゃないかと思います。子どもたちに端末を使って調べ物をさせるみたいなのは、多くの先生方がイメージがつくんでこれはできる。

一方で、例えばこの下から3つ目のテストを受けるとか、下から6個目のデジタル教科書を使う、これは割合低いんです。それと、こういったものってイメージをもつ先生はもてるけども、そうじゃない先生方はイメージがなかなかもてないということは、やっぱり校内で先にやっている人を実際に見るとか、地域の中で、千代田区の中で、そういったものを、実践を共有していくとか、結構、それだけでもなかなかイメージがつかないとなるならば、やっぱり研修みたいなものやってみていくんですけど、でも、それも一堂に集めるわけではなくて、先生方の個別最適な研修みたいなものが必要だと思っています。それ、もうミニ研修ですよ。先生方、非常に忙しくて、放課後の30分、20分のところもなかなか難しいと思います。であるならば、先生が10分の時間の中で、今日はこれについてやります、聞きたい人だけ来てくださいとか自信のない人だけ集まってください、自信のある人はどうぞ別の仕事してくださいみたいな形で、先生方が研修を選べる。その講師役も、ちょっと得意であるとか、ちょっとやってみたいみたいな人たちを講師役、ちょっとリーダーやってみてほしいみたいな形を広げていくみたいところで、先ほどのグラフのこういったところの右側の人を少しずつ左側に連れていくみたいなことが、1つの方策として考え得るのかなと思っています。

また、こちらは文部科学省が出している校務DX化チェックリストですね。先ほど、佐藤先生がお示ししたものと一緒なんですけども、こういったものを確認してみると、全国的にも校務全体としてデジタル化しているものと全くしていないものって、もう物すごく分かれてきています。この一個一個の項目を見ていったときに、これをしていきますかと文部科学省が問う意味、反対側を考えていくと、してくださいよと捉えられますよね。そうなってくると、チェックリストの中でももちろんしているところはいいんですけども、でも、そうではないところを、ぜひ千代田区または校内の中で、校務の中をDX化していくというところが大事なのかなと思うんです。

そういった中で、先生方は校務を通じながら操作経験を積んで、そして、感覚を覚えて、それを授業の中に反映させていくというところに行くのかな

と思います。授業でいきなりやっぱり失敗したくないのは、先生方はみんな思っていると思うんです。進度が遅れてしまうし子どもたちに迷惑をかけてしまうかもしれない。そうなったときに、やっぱり得意でないことって積極的に入れるのはちょっと難しいと思うんですけど、校務であれば、子どもたちに直接関わるというよりも校務の中での完結ですので、分からなければ隣に聞くこともできるし、自分が苦手であつたらその時点で教えてもらうみたいなことも可能になりますので、ぜひこういう学校内の連絡のデジタル化とか、連絡1つ取っても、どういうふうに先生方が情報共有しているか、学校と教育委員会がどういうふうに情報共有しているか、学校、保護者がどういうふうに情報共有しているのかみたいなのところから、結局、先生方のスキルを高めたり、先生方が慣れたりということのヒントは得られるんじゃないかなと思っています。

少し事例を取り上げますと、これはチャットを使った教育委員会と学校の情報共有ですね。例えば、4月2日の朝に教育委員会のほうから各学校の教務主任と研究主任と情報主任の名前を入力してくださいというのが来るんですね。期限は4月2日までです。4月2日の朝に発信して、4月2日に報告してくださいみたいなことが実際可能になる、4月、めちゃくちゃ忙しいのに。何でかっていったら、みんなに共有されているんで、気付いた人が打ってあげればいいわけですね。すると、その人が必ずしもやらなくてもいいわけですし、それによって、ああ、隣の小学校は誰が研究しているんだろうとか、そういったことも学校同士で分かるみたいなことで、情報展開、情報共有が素早く行えるみたいなところですね。こういったところで当たり前の環境になっていけば、じゃあ、授業のこの場面でこの意見集約を使ってみようみたいなことにも当然いくし、先生方、やっぱり授業の中でどう使うのかということの中で、こういった校務での経験というのが生きてくるのかなと思います。

また、デジタルで効率的に働ける場をつくるということが、今、極めて大事だと思います。全国で教員不足が生じているということは、皆様ご承知のとおりだと思います。やっぱり先生方の働く場が意欲的なものである必要があると思いますし、その中の1つが、いかに効率的に働けるかということだと思います。そうしないと、やっぱり人が来ないですね。私も教員養成系の学部にいますので、学生と日々対話をするんですけど、先生方の職業って、本当に、学生から見ると物すごく大変なんじゃないかってイメージをもっている。実際、大変なんですけど、でも、自分たちが学校、小学生、中学生だったときと比べて、こういったデジタルを使って、かなり効率的になっているよ、みたいなことを学生に積極的に話をしていくことが、きっと、じゃあ、教員として頑張ってみようかなみたいなところにつながってくると思いますので、ちょっとしたことですけど、ぜひデジタル化でより効率的にできるんじゃないかというところを追求していく。先生方が変えていく、そういったことが格差の縮小みたいなことにつながっていくと思います。

もっとシンプルに言うと、例えばこういったクラウド上で指導案を相互添削していくみたいなのところですね。これももうやっている学校もあるかもしれませんが、まだの学校であったら、先生方が指導案をつくって、みんなで協議するときとかに、いちいち打合せするのではなくて、これをクラウド上でやってしまって、その分、みんなで検討する時間、今まで1時間だったものを20分に縮めるとかぐらいの効率化につなげていくということが大事だと思うし、誰がどんなコメントを残したかって、クラウド上でお互いに見ることで、そこから学ぶということも大事なのかなと思います。

こちら、OODAループと呼ばれるものになります。PDCAはまず、P、プランを立てます。でも、OODAループは、まずやってみましょうみたいなものになります。見て、ああ、なるほどこういうことかって分かったら、やると決めたら、実際やってみる。また、結果を見て改善していくということですよね。機能を少しずつ覚えつつ、とにかくやってみて、スピーディーにいい結果を出すというマインドを、ぜひ校内の中で、それいいチャレンジだねとか、そういったのをまずはチャレンジしたことを認めてあげる、評価してあげるということも大事なのかな、なんてことを思っております。

私からは以上です。

委員長 三井先生、ありがとうございました。

最後に、佐藤先生、お願いできますでしょうか。

佐藤委員 よろしくお願いいいたします。

まず1つ目でございますけども、千代田区の教員のICT活用指導力が高いというような、そういうお話がありました。本当かどうかということを確認していただきたいということです。

これが本当に高ければ、この会議体は何なんだという話が言われるんじゃないかなというふうに思うんですね。この調査は、私も三井先生も学校現場にいて、3月になるとやってくるというものですけども、形骸化していると僕は思っています。子どもにICTを指導する能力があるということ、例えばC2でいうと、児童がコンピューターやインターネットなどを活用して、情報を収集したり、目的に応じて情報や信頼を選択したりできるように指導すると書いてありますね。これの質はどうかということ。どのくらいしているのかという話もありますし、どのくらいきちんと収集できるのか、どのくらい選択できるようになっているのか、何かそんなようなことをきちんと調べていく必要があるんじゃないかなというふうに僕は捉えています。もし、指導力が高いというふうに本当に言うのであれば、ここまで議論する必要はあるのかどうかみたいなことが、疑問に感じることでですね。ですから、ぜひメタ的に何か一度やっていただく、質的に調査していただくということをご検討いただきたいというふうに考えております。それが1点目でございます。

2つ目は、キーボードのスキルの話が、話題に上がっていたので、具体的なデータをお示しいたしますけども、過去2回、CBTによる調査が行われ

ています。情報活用能力がどのくらいあるのかというものです。2014年と2022年に実施されています。

2014年は、小学生のタイピング速度は1分間に6文字でした。中学生は17文字、それから、2022年は、小学生はそれは少し上がらないと困るわけで、15文字になっています。中学校、高校はこのくらいですけども、このくらいでやっていけるのかって考えるわけですね。やっていけないんじゃないかということです。小学校5、6年生、中学校1年生程度の手書きのスピードが大体40文字ぐらいって言われるんですね、1分間に。これ、40文字を超えていないコンピューターの入力速度というのは、ほぼコンピューターの意味がないということですよ。コンピューターというのは高速化していく、効率化していくというときに使う道具じゃないですか。だから、そう考えたときに、千代田区は真にどのくらいなのかということを知りたいと思います。千代田区が遅いなんていうふうになったら、我が国として格好悪いんじゃないかなというふうに僕は考えていますので、格好悪い入力速度になるような千代田区になってほしくないという思いでお話をしております。日本のど真ん中の子どもたちのタイピング速度がやばかったら、G7あたりでたたかれるんじゃないのかなというふうに僕は考えているところです。その辺りのことをぜひご検討いただきたいということですね。やり方はたくさんございますので、1回きちんと見ていきましょう。お願いいたします。

それから、ICTに関わってお話をいたします。個別最適な学びの議論がありますけども、そういうことをやっているような学校あるいは情報活用能力をきちんと身に付けていこうという学校は、いいということがよく分かるデータです。

例えばICT活用で自分のペースで学習ができるということと、先生がよいところを褒めてくれるということには、いい相関があるという話ですね。自分のペースで学習を進めるということは、子どもたちの意思決定、判断、選択、この辺りを先生が尊重した上で、先生が適切に導いていく、これが個別最適な学びだと思っておりますけども、そういうところは、子どもの幸福感とか自己有用感が高いと言っているわけですね。

それから、ICTで友達と考えを共有、比較できるということと、自分と違う考えについて考えるのが楽しいことであるということです。つまり議論するということだと思っておりますけども、これは楽しいと思えるということをやったりとか、ICT活用で楽しみながら学習するのと学校に行くのが楽しいということは相関があるということですね。これは全部関係していると思っておりますけども、何か学力であるとか、そんなことを考える前に、まずは子どもの自己有用感がいいのかどうか、幸福度は高いのかどうか、挑戦する力はあるのかどうか、そんなことがベースにあった上で学力等の議論をしていただきたいなというふうに僕は考えています。何か子どもの、自己決定が尊重されずに、学力、学力みたいな話に結構なりがちだと思いますけども、そも

そもその場において楽しいのかとか、ここにいたいだとか、そんなことが最初にないと、何か本末転倒な議論になってしまうんじゃないかというふうにいつも考えているところでございます。

次が、これ、神田一橋中の先生が見に行った長野県の学校になりますけども、この学校では、授業が始まるときに、必ずどのクラスのどの教科の先生も、では、始めてくださいって言って、子どもにもう任せちゃうんですね。そういうことができる学校や子どもたちに育て上げられるかどうかだと思います。もちろん先生が適切に導くということはしているわけですけども、こういうふうに言えるということは、つまり子どもたちに期待をしているであるとか、あるいは子どもたちに対しての責任をもっているとか、そんな一言だというふうに僕は考えています。これが言えないと、子どもたちはどうなるかということですけども、やはり自分一人で学んでいけるという力というのはついていかないというふうに僕は考えています。いつまでも先生がいないと学習ができないことをやっていくのか、そうじゃないのかということをごひ考えていただきたいなと思っています。

もう一つは、ある学校のグループ活動です。英語の授業でしたが、先生は5分でディスカッションしてくださいという話をしていました。このグループのこの4人に、この5分というのはちょうどいい時間なのかということ聞いてみました。そうすると、この男子はちょうどいいというふうに言いました。ですけど、女子はちょっと長いなとか、長いですというふうに言っていました。ここに何か自己決定とか個別最適な学びみたいところのヒントが隠されているんじゃないかなというふうに思います。

それから、三井先生がおっしゃっていた先生の学び方の話ですけども、先生の学び方は子どもの学び方と相似すると言っております。ですから、聞くだけの学び方や黙っているだけの研修、ICTが使われていない研修というようなことをやっていけば、もちろん先生方はそう学んでいるので、子どもたちにもそうするのではないかということですね。これは中教審でも言われていますし、独立行政法人教職員支援機構でも言われております。そのような研修がどのくらいできているのかということをごひ調査していただきたいなというふうに思います。

それから、校務の話がございましたけども、いろんなやり方があるんですが、一番シンプルなやり方は、まず、画面を2つにするということです。画面が1個のコンピューターだと、作業効率は非常に悪いわけですね。デュアルディスプレイにしているというようなことを公立学校であまり聞かないので、最近、そういうことをやってみたんですけども、非常に評判がいいです。ですから、1台、1万円ちょっとで買えるようなディスプレイですから、千代田区様からどんどんこういう取組をして広めていただきたいなとそんなようなことを感じております。

最後になりますけども、これも三井先生おっしゃっていた話ですね、教員養成の話でしたけど、これは私の研究室の学生の話です。よく使うんです

が、ある自治体に初任者として就職をしました。ですけれども、G o o g l e フォームが印刷されて紙で配られたみたいな、そんなICTの使い方で、もうICTの使い方じゃなくなっている。紙で回答したというふうに来たんですが、これを経て、その学生はその自治体を辞めました。こんなとこ、働いてられないということですね。さんざん教員養成、学生たちはクラウドで仕事をして、勉強をしているわけですね。もうそんな中で、急に紙なんてみたいな、そして、こんなことをされたら、もうやっつけられないわけですね。こういうことをやる先生が、現実的にどの自治体にも多分いると思います。多分、千代田区はいないと思うんですけども、教員採用試験の倍率がとっても低い状態です。人口減少でどこでも若者は欲しい状態のときに、先生たちは積極的に辞めている。積極的に学校や自治体を替えていく時代です。我々の時代は、そんなことを言わずに、公務員にしがみついて頑張るみたいなことをやっていたけども、もうそうはいかない時代になってきていますので、ぜひ若者が働きやすいという職場環境をDXで実現していただきたい、これが僕の思いでございます。

以上になります。よろしくお願いいたします。

委 員 長

佐藤先生、ありがとうございました。

本日は、それぞれのお立場から、これまで様々な貴重なご意見をいただきました。これらを受けて、上原指導課長から、総括的にまとめをお願いいたします。

上 原 委 員

様々な議論ありがとうございました。本区に対する様々な問題提起と課題等も、また見えてきたかなと思います。そういった課題が出てくるということは、裏を返せば、推進されてきているところで、また新たな課題が見えてきているのかなというところが感じたところです。

大学の先生方からも様々ご指摘いただいた部分というのは、当然、今後、生かせる部分というのはたくさんありますし、こちらとしてもいろいろ考えなきゃいけないところもありますし、また、一方で、各学校では特色があって、工夫した取組を、本当に先生方、校長先生を中心にやっつけているというのも、今日、2人の校長先生のお話からも非常に分かったところです。

私自身も、実は昨年度まで校長をやっていましたけれども、自身の学校のICT活用等を考えていくと、やっぱり管理職がいかに中心になってそれを進めていくかというところが、今日、2人の校長先生いらっしやっていますけれども、まさにそこを推進していくような、どんどんどんどん引っ張っていただいているようなお二人の校長先生であるからこそ、進んでいるのかなと思っています。

私も校長をやりながら、先ほどのA、B、C、Dの能力というところで、実は、重点月間などを設けて、そのテーマだけ設けて、先生方、いわゆる個別最適に自分でどう研修していくかという結果を設けたとか、そんなこともやったのをふと思い出しました。

あと、若い先生がすごく使えるというようなイメージがあるんですけど、確かに活用する能力あるんですが、授業の中での活用というイメージがなかなかまだ少ないかなと思います。

そうすると、各学校でのその辺りの風土だとか取組だとかというのが、若い先生方が入ったときにその辺りができていると、その先生方も非常にやる気に満ちて、取り組んでいこうという思いがあっていいのかなといろいろ考えたところです。

いずれにせよ、教員の働き方も含みながら、これからもっともっと推進していく上では様々課題があるし、さらにこちらとしても、区としてもいろいろアセスメントに基づいて課題整理して、どう推進していくかというのを考えていく必要があるかなというのは、改めて感じたところです。

様々な学びがありました。とても充実した委員会だったかというふうに思います。本日はありがとうございました。

委員長 上原指導課長、ありがとうございました。

最後に、項番5、事務連絡です。

事務局からお願いいたします。

指導主事 次回の日程についてです。今回は1月から3月に実施したいと考えております。改めて委員の皆様には日程調整をさせていただきますので、どうぞよろしくをお願いします。

事務局からは以上です。

委員長 それでは、以上をもちまして令和6年度第1回千代田区教育ICT推進委員会を閉会とさせていただきます。

皆様、ありがとうございました。